

12人姉妹の物語 タオ・プッタセーン

男山、女山の伝説

訳：橋本 彩 出典：Mixay, SOMSANOUK. 2000, "Treasures of Lao literature" Vientiane: Vientiane Times Publications, pp.33-41.

世界遺産の街ルアンパバーンからメコン川を渡ったところに、女性の頭と男性の頭が折り重なって横たわったような輪郭を描く2つの山がある。その2つの山は男山と女山と呼ばれ、それにまつわる伝説がある。

むかしむかし、インタバターという国があり、そこに貧しい木こりとその妻が住んでいた。彼らは森の木を切り、どうにか暮らしていた。毎日家族が食べていくには、木を切ったお金だけでは到底足りなかった。夫婦には12人の美しい娘たちがいたが、十分な食事を与えることもできなかった。

十分な食事を与えられなかったので、娘たちは日増しに痩せていった。木こりの夫婦は日増しに木を切る体力がなくなり、食べ物を買うにも困るようになった。

ある日、木こりの夫婦は重い心持ちながら、娘たちを捨て、彼女たちの運命を天に任せる決心をした。木こりの夫婦はきつとどこかのお金持ちに娘たちは拾われ、今までよりも10倍は良い暮らしが出来るだろうとお互いに慰め合った。貧しい木こりの夫婦は気持ちを固め、娘たちを深い森の奥へと連れて行き、置き去りにした。

12人姉妹の末娘にナーン・ラーという頭の良い娘がいた。ナーン・ラーは姉たちを率いて帰り道を探しながら、木の実や野生の果実を姉たちに教え、飢えをしのいでいた。

娘たちはさまよい歩いているうちに、人間の肉を何よりも好んで食べる恐ろしい人喰い女鬼であるスンタラーの住むワイニャラッパティという国に足を踏み入れていた。奇跡的にスンタラーは、いつも遊び相手を欲しがっている一人娘のナーン・カンヒーの遊び相手として、12人の美しい姉妹を食べずに生かしておくことにした。しかしながら、スンタラーは娘たちがもっと美味しそうに大きくふくら育ったら、1人ずつ

つ食べるつもりでいた。

危険を感じた12人姉妹はどうか逃げ出したが、激怒したスンタラーは至るところを探して回った。12人姉妹は、苦境に立たされている娘たちを気の毒に思った雄牛の王であるパニャ・グアに助けられ、彼の大きな口の中へ隠れた。もう安全なことが分かったと、雄牛の王は娘たちを逃してあげた。12人姉妹は自分たちの家へ戻る道を探し続けたが、家ではなくパールッタセーン王の領地に辿り着いた。王はすでにうっとりするほど美しい娘たちに成長していた12人姉妹を見た瞬間にその美しさの虜となり、荘厳な式を執り行い、12人姉妹全員と結婚した。

その話を聞きつけたスンタラーは激怒し、12人姉妹に復讐すべく絶世の美女に姿を変え、パールッタセーン王国へと向かった。彼女の魅惑的な美しさにパールッタセーン王は惑わされ、スンタラーの企みにあつという間にはまってしまった。王は彼女と結婚し、スンタラーの巧みな誘惑によって彼女を第一王妃とした。

12人姉妹に対する復讐の第二段階として、スンタラーは薬でも医者でも治すことのできない難病に罹ったふりをし、本当はスンタラーと共犯関係にある霊媒師を宮廷に呼ぶよう王に願い出た。宮廷に呼ばれた霊媒師は、トランスに入ったふりをして不思議な呪文のようなものをつぶやきながら、第一王妃の病気を治すためには、12人姉妹の王妃たちから目をくり抜き、あらゆる方角の精霊に同時に捧げ、そして、12人の王妃たちを永久に王国から追放する必要があると述べた。

完全にスンタラーの魔術にかかっていた王は霊媒師の指示に従い、12人の王妃たちから目玉をくり抜き、追放するように命令した。

スンタラーは12組の目玉を娘であるナーン・カン

ヒーに送り、ワイニャラッパティで大切に保管するよう命じた。

12人姉妹は追放された時、全員すでに身ごもっていた。姉妹たちは人間があえて危険を冒してまで来ないような深い森の深い洞窟に逃げ込んだ後、順々に子どもを生んだ。しかし、子どもを育てる方法はなく、彼女たち自身が生き延びるために生まれてきた赤ん坊を次から次へと食べざるをえなかった。末娘のナーン・ラーは自分の子どもを食べることができず、密かに自分の子どもを助けることにした。幸運にも、不思議な運命のいたずらで、ナーン・ラーは片目しかくり抜かれなかったため、彼女は片目で見る事ができた。彼女は子どもを隠し、「赤ん坊は寝ている間に死んでしまったため、肉が腐って食べられなくなってしまった」と姉たちに嘘をついた。そしてナーン・ラーは姉たちに見つからないように、子どもが泣いたり、音を立てたりしないように気をつけながら育てた。

12人姉妹はどうやって食べていけばよいのかわからなかった。すると、近くの森に住む野生の雄鶏が彼女たちを気の毒に思い、毎日田んぼと洞窟の間を何往復もして、彼女たちが生きながらえるだけの米粒をくちばしで運んでくれた。

ナーン・ラーの子はハンサムでたくましい、とても賢い子に育った。彼はナーン・ラーの姉たちに気づかれないよう、近くの村へ行き、同じぐらいの歳の男の子たちと遊ぶように母から言われていたため、ほとんどの時間を近くの村で過ごしていた。ナーン・ラーの子は、村の男の子たちが飼っている雄鶏たちとの闘鶏に勝ち続けていたため、人気者になっていった。

ある日、彼はチェスの試合(マーク・レー)に参加するため町へ出かけていった。彼はチェスにも秀でていたため、若者だろうと年寄りだろうと、彼に挑戦するものは全て負けてしまった。彼のチェスチャンピオンとしての名声は広く知れ渡り、パールッタセーン王の耳にまで届いた。王は若いチェスチャンピオンを宮廷に招き、宮廷のチェス王者達と試合するのを観戦した。

王は若者の腕前と堂々とした態度にいたく感銘を受け、彼にどこ出身で、どのようにしてチェスの腕を磨いたのかを尋ねた。若者は正直に、臆することなく

彼の話をし、その話を聞いた王は彼が自分の息子であることを確信した。王は彼に宮廷に残るよう申し付け、彼にブッタセーンという名を与えた。そうして彼は、洞窟で生きながらえている母と叔母に十分な食べ物と必要なものを得ることができた。

王子ブッタセーンが存在がおもしろくない王妃スントラーは、彼を排除する新たな計画を練った。彼女は再び医者では治すことのできない得体のしれない病気にかったふりをした。そして彼女は、ワイニャラッパティに住む娘ナーン・カンヒーからもらう特別な薬でしか病気を治すことができないと弱々しい声で王に告げ、その薬を取りに行く役目は信頼できるブッタセーン王子にしか頼めないと王に訴えた。王子は優しく、常に人を助ける性格であったため、何のためらいもなくワイニャラッパティへ行くことを承諾した。

スントラーはブッタセーンに娘に宛てた手紙を預けた。王子は羽をもつ馬の鞍についている鞆に手紙を入れ、ワイニャラッパティへと向かった。途中、彼は尊敬する隠者(パー・ルーシィ)のところへ寄った。この隠者はブッタセーンが託された手紙に「愛しい娘よ、これはおまえのおいしいごちそうだよ。すぐに彼を殺し、食べておしまい」と書かれていることを見抜き、何も言わずに、何もせずに、彼の不思議な力を使ってその手紙の内容を「愛しい娘よ、この手紙を携えてきたのはとても大切な人で、ブッタセーン王子だ。彼を丁重にもてなし、結婚しなさい。そしておまえが持つ魔術をすべて彼に教えてあげなさい」と書き換えた。

ナーン・カンヒーは常に母親を喜ばせたいと思っていたので、ハンサムで立派な王子と結婚できることをとても喜んだ。そして2人はとても深く愛しあうようになっていった。

カンヒーは人間も獣も通過することができないトゲだらけの深い森や、追ってくる敵を遮る火の湖や、落ちたら確実にすぐに死んでしまう沸騰した川を作り出す方法をブッタセーンに教えた。また、彼女だけが知っている秘密のライムの樹をブッタセーンに見せ、使い方も教えた。他に何も見せるものがなくなると、カンヒーはスントラーの動く心臓と共に12人姉妹の目玉が隠されている巨大な洞窟へと彼を連れて行った。

スントラーは12人姉妹を探しに出る前に、心臓を娘

に預けていた。スントラーはその心臓が動いている間は生きていることができるが、心臓が潰れたらすぐさま死んでしまうのだった。

賢いプッタセーンは全てを書き留めた。なぜなら、彼は妻であるカンヒーをととても愛していたけれども、母と叔母たちになされた残酷な仕打ちを心から悲しんでおり、せめて母と叔母たちの目を元通りにしてあげることが彼の義務であると感じていたからである。

そしてある日、ナーン・カンヒーが眠っている間にプッタセーンは母と叔母たちの目玉とスントラーの心臓を洞窟から持ちだし、素早く羽のある馬に乗り、ワイニャラッパティを後にした。

ナーン・カンヒーはプッタセーンがいないことに気がつくと、彼を連れ戻すために彼の後を追った。彼女が彼に追いつこうとすると、プッタセーンはカンヒーが教えてくれた魔法を使った。彼が魔法のライムを投げるとトゲだらけの深い森が現れ、それはナーン・カンヒーの行く手を阻む障壁となった。

カンヒーは自分の魔法を使ってプッタセーンが作った障害を乗り越えていく。プッタセーンは再び別のライムを投げ、荒れ狂う火の壁を作り出す。それでもカンヒーは素早く火を消す魔法の湖を作り出した。ためらうことなく、プッタセーンはカンヒーの力を持ってしても渡ることができない流れの早い巨大で深い川を作り出した。

カンヒーは女性の武器を使って涙ながらにプッタセーンに戻ってくるよう訴えた。しかし、プッタセーンの心は母と叔母たちを助けることだけに向いており、振り返ることなく去っていった。

ナーン・カンヒーは永遠に彼を失ったのだと分かると、心細くて病気になる、彼女の心は砕け散り、死んでしまった。

プッタセーンはようやく子供の頃の家である森の深い洞窟へたどり着き、まっすぐ母と叔母たちのところへ行って目を元通りにしてあげた。12人姉妹は視力が戻ったことを喜び、ナーン・ラーが姉たちをだまして自分の子供を助けていたことを許した。プッタセーンが

生きていたことで、すべてが元通りになったのである。

プッタセーンは次に父親の宮廷へと向かった。王妃スントラーは彼がまだ生きていることを知ると、激怒して彼女の元の姿である人喰い鬼へと姿を変え、彼を食べようとした。しかしプッタセーンは準備をしていた。彼は自分の刀を取り出すと、ワイニャラッパティから持ってきたスントラーの心臓に刀を突き刺した。そしてスントラーはその場で死に絶えた。

一部始終を見ていた王は、12人の若い王妃たちを追放し、ひどく危険な目に合わせてしまったことに対して良心の呵責にさいなまれ、プッタセーンに母親と叔母たちを洞窟から呼び戻すよう頼んだ。

プッタセーンが12人の王妃たちを宮廷に連れ戻すと、王は彼女たちに許しを乞い、再び彼女たちを王妃の座に戻した。それからというもの、宮廷も王国も大いなる喜びに満ち溢れた。

しかしながら、プッタセーン自身は喜ぶことができなかった。彼は妻であるナーン・カンヒーをまだとても愛していたので、彼女の元へ戻るため急いでワイニャラッパティへ向かった。彼がワイニャラッパティに着くと、ナーン・カンヒーはすでに亡くなっており、それを知ったプッタセーンは驚きのあまり心臓が張り裂けて死んでしまった。

プッタセーンとナーン・カンヒーの強い愛の力によって、2人の身体は頭と頭が重なって横たわる姿で山となった。そしてそれが男山と女山となった。

ルアンパバーンの年寄りたちは今でも、手紙の内容を変えて若者の命を救った隠者とプッタセーンが会ったパー・タツ・ケーの森を喜んで来訪者たちに紹介している。

ナーン・カンヒーが夫に置いて行かれた悲しみのあまり亡くなった場所である、天国のような庭(スワン・テーン)から遠くない所で、少し離れた下流のメコン川の真ん中にライムの砂州(ハート・マークナーオ)を見ることができる。そこでは、ナーン・カンヒーを足止めするためにプッタセーンが投げた魔法のライムの種から育ったライムの木が育っている。